

## 【1】保育の場の音楽とは何か

### 1. 音楽が保育の場にある意味

私たちは歌を覚えて自分の中にしまい込んでおき、歌いたくなったら取りだして口ずさむことができます。私たちは歌に励まされ、慰められて、自分の気持ちを立て直すときがあります。美しい風景に出会ったり、人のやさしさにふれたり、心浮き立つことがあったりすると、思わず歌が口をついてでてきます。さらに私たちは、人といっしょに音楽を楽しむことで、気持ちを通いあわせることができます。そう思うと、音楽は生きるうえでの大切なパートナーだといえるかもしれません。そのパートナーは、保育の場にも不可欠です。歌う、踊る、奏でる、演じるといった音楽的な活動は、保育者が用意するから子どもたちが取り組むのではなく、そもそも子どもたちになくてはならないものであるので、保育者も子どもたちと楽しんできたのではなかったでしょうか。

子どもたちにとってそのなくてはならない音楽が、なぜなくてはならないか、それはいうまでもなく音楽の世界にひととき遊ぶことが楽しいからでしょうが、ではなぜ楽しいのかといえば、音楽を身体に響かせることが心地よいからでしょう。楽音の組み合わせが創り出すフレーズの意味や楽曲全体が語る意味がわかるからでしょう。物語や見立て遊びのように音楽に没入することで、音楽が作り出す世界に旅することができるからでしょう。そしてなにより、同じ歌を歌う、同じフレーズを奏でる、同じ振りを踊るというコミュニケーションがもたらす“いっしょが楽しい”を求めてやまないからではないでしょうか。

そもそも音楽とは何か、音楽における表現とは何か、表現を可能にする音楽の要素にはどのようなものがあるか、などを問いながら音楽カリキュラム編成の基本的な考え方を示すために、保育の場に音楽とともに在ることの意味を、ひとまずは次のように整理しておきます。

1. 音楽とは、音声や楽音の集合が生成する意味を身体に響かせ、異なる世界に遊ぶこと。
2. 音楽が保育の場にある意味の一つは、音楽という表現媒体によるコミュニケーションによって、子どもや保育者が互いに分かりあえることに人としての喜びがあること。
3. 音楽が保育の場にあるもう一つの意味は、音楽の世界に没入することで人の内奥性の次元が開かれて、子どもや保育者に生きる意欲がもたらされること。

### 2. 保育の場の音楽

私たちの生活が音楽に満ち満ちているように、保育の場にも多くの音楽が用意されています。朝の集まりの会や食事のまえなど、音楽を使って子どもたちの気持ちを切り替える風景は、保育の場でよく目にします。書店の保育図書コーナーへ足を運べば、季節の歌、

行事の歌、手遊び、歌遊び、器楽合奏、オペレッタ、リトミックなどの教材がところ狭しと並んでいて、保育者が子どもたちのために日々の保育に多くの音楽を準備していることが窺われます。ところが、保育として子どもの音楽を考えると、はたしてこのように保育者によって用意されるものだけを音楽としていてよいのでしょうか。

子どもが身体を揺らすとき、子どもが腰掛けて足をぶらぶらさせるとき、子どもの身体にはリズムが生まれています。喃語は、意味の言葉としては情報が少なくても、音楽的な感情表出と捉えればリズムカルでありメロディックですらあります。あるいは、保育者が子どもに語りかけるとき、その音声は少し高くなり、音節を区切って繰り返し、表情もゆたかです。それを音楽的といってもよいでしょう。それはおそらく、音声言語を音楽的に身体に響かせることが、子どもに気持ちを伝える最良の手段であることを保育者が経験的に知っているからではないのでしょうか。このような音楽以前の音楽も、保育の場では大切な音楽です。

ここでは、音楽以前の音楽を「表出される音楽」、保育者によって用意される音楽を「表現される音楽」とします。「表出される音楽」に着目することで、保育の場の音楽が保育者によって一方的に指導されるようなものではなく、子どもからののびきならない要請であることが確認されるでしょうし、それがやがて「表現される音楽」を楽しむための素地にもなることが理解されるでしょう。

#### （１）表出される音楽

子どもが音声言語によって自分の欲求や要求、あるいはうれしい、かなしい、たのしい、さみしいなどの気持ちを相手に伝えようとするとき、音声言語には抑揚が与えられます。言葉としての直接的な意味を持たない喃語のような音声では、とくに強弱や高低、繰り返しに気持ちが映し出され、音楽の萌芽を読み取ることができます。有意味語を獲得した後も、子どもは言葉に独自の音の高低を与えて、わらべ歌の原型のように口ずさみます。たとえば描画活動において、筆の動きを後押しするかのように言葉が繰り返されたり、保育者との会話がゆっくりとやさしく進行するとき、そのやり取りを音楽的に感じ取ることも少なくありません。それはあたかも描画が展開する空間に音楽的空間が重ねあわされて、描画空間が立体感を増すようです。このように、フレーズの意味は希薄であっても、感情表出の媒体の一つとして音楽的な音声が子どもによって用いられていることに保育者が気づいていることが、保育の場では重要です。

有意味語であるか否かを問わず、子どもが発声する音楽的な抑揚が付けられた音声言語を保育者が模倣したり、あるいは保育者もみずから子どもの行為に音楽的に装飾された言葉を添えることは、やがて音楽を媒体とするコミュニケーションの土台を培うものとして大切にされなければなりません。

#### （２）表出から表現へ

“まぜて”と問いかけ、“いいよ”と応える。遊び場面で子どもたちが多用する常套句には、長二度の音程と言葉が内包しているリズムによる音楽的な表現がみられます。このような経験を重ねて子どもたちは、即興のみじかいフレーズを口ずさんで遊んでいます。あるいは、繰り返される動作に擬態語（視覚や触覚など、聴覚以外の感覚器官によって体得

された印象を言葉で表現した語のこと。ふらふら、ゆらゆらなど）が添えられたり、擬声語（人や動物の声をまねた語。わんわん、きゃあきゃあなど）や擬音語（さらさらの砂、ざあざあ雨が降るなどのようにモノが発する音を言葉で表現した語のこと）によって動物やモノになりきったりして遊んでいます。そのような経験は、自身の行為や見たものの動きから言葉が生まれ、その言葉がリズムをつくり、それに音程が与えられ、音楽的なフレーズの断片が子どもたちによって歌われるのですが、このとき、子どもたちの中に歌うことへの積極性がどのくらいあったのかを考えると、それはまだ「表現される音楽」というよりも「表出される音楽」に近いかもしれません。もしかすると言葉が先ではなく、モノの動きや行為の連続から感じとられた拍動（これもバイタリティアフェクトです）に言葉が載っていくのかもしれませんが、こうした子どもたちの音楽的な営みは、表出される音楽から表現される音楽への移行期であり、表現される音楽を確実にする素地となってゆきます。

### （３）表現される音楽

保育の場には、先にみたように子どもの遊びから生まれる音楽を素地にして、保育者によって子どもたちに与えられる音楽があります。それは日々の生活に彩を添える音楽であったり、四季に取材した歌であったり、行事の歌だったり、物語の世界や子どもの世界を歌った歌だったりするのですが、子どもたちはそれらの歌を覚えて、みんなで歌ったり、踊ったり、奏でたり、演じたりして楽しみます。あるいは家でお母さんに歌って聞かせたり、踊って見せたりするでしょう。ときにはひとりでこっそりと取りだして、鏡の前の自分と楽しんでいるかもしれません。このように音楽は楽しいと、子どもに自覚的に歌われたり、踊られたり、奏でられたり、演じられるとき、音楽は「表現される音楽」として、保育の場に登場します。

### （４）楽器を用いるのはなぜか

タンバリンやカスタネット、大太鼓、小太鼓などの打楽器をはじめ、音階を持つハーモニカ、鍵盤ハーモニカ、マリンバ、ビブラフォーンなどにいたるまで、保育の場にはたくさんの楽器が導入されてきました。それは乳幼児からの要請というだけでなく、学校の音楽教育での形式化した合奏形態が保育の場にも持ち込まれたという側面もあるでしょうし、保育用具を考案し、製作してきた企業の影響も少なくなかったと思えます。ともあれ、幼児期の子どもにとって楽器とは何かという問いが真摯に議論されては来なかった経緯があるのではないかと懸念されるところです。

子どもとモノ、子どもとおもちゃの関係は保育の場に重要な課題であり、子どもと楽器もそのような観点からのアプローチも必要としますが、ここではさしあたり、日々の子どもの様子から、次の３点を指摘しておきます。

#### ①保育者への憧れ

ピアノを弾いて歌ってくれる先生に憧れて、あるいはピアノという不思議な箱に魅かれて子どもはピアノに触れてみようとしみます。子どもの試弾は大人にしてみれば音楽になっておらず、がんがんやられてはうるさいのでやめて欲しいということになりがちですが、

できればそのとき、ピアノが弾ける保育者への憧れや、弾くとききれいな音が出る不思議さに少し付き合っただけでいいと思います。

岩屋保育園では、7月のミルクィウエイコンサート、1月のキティランドコンサートに向けて、子どもたちと保育者たちの合奏が保育の場に持ち込まれますが、ドラムやパーカッション、ベース、サキソフォン、鍵盤楽器などを操る保育者に子どもたちは関心のまなざしを向けてくれます。このとき、だれよりも保育者たち自身が奏でる喜び、操る楽しさを満喫していることが大切です。間違えないように気を揉みながら子どもの伴奏に努めるのではなく、毎回の演奏が子どもとのあたらしい音楽の創造でなければならないでしょう。少なくとも岩屋保育園の音楽活動は、この30年のあいだ子どもたちと豊饒な音楽の時間を共有してきました。

## ②所有する喜び

自分の楽器を手にした喜びは、ジャンルを問わず楽器を演奏する人であればだれもが知っているはずです。それは野球少年にとってのグローブやバットとも共通していて、所有する喜びに加え、目指す音楽や野球の道具としてはたらいてくれる大切な相棒のように大切なものになります。

岩屋保育園では鍵盤ハーモニカを購入してもらいますが、ケースから初めて楽器を取り出したときの子どもたちは満足げであり、得意気でもあります。それは小さいころから大きい子の子の様子を見て憧れてきたからでもあるでしょう。1年を通していつも持ち歩く子さえいますし、園庭に持ちだして保育者と楽しむ姿も多く見られます。

## ③奏でる楽しさ

むやみにビーブーやるうちにはいいのですが子どもたちはすぐに飽きて、メロディらしきものを吹いてみようとしみます。その頃を見計らって楽曲を提案すると、たちまち子どもたちはその虜になるのですが、楽器はそうやすやすと言いなりににはなってくれません。それでも繰り返し取り組むいあだに頭が覚え、体が覚え、指が覚えて、“みんなと一緒に楽しい”にたどり着きます。

楽器に息を吹き込み、指でキィを押さえることで聞こえてくる鍵盤ハーモニカの音は、指先やマウスピースからの振動も伴って、自分の耳に届きます。二人以上であればその音は、友だちや先生の音に融けこんで聞こえてきます。自身の行為が音となり、アンサンブルとなって聴こえる楽しさは、歌を身体に響かせる楽しさとはまた一味違ったものです。そこには操ること、奏でることの楽しさが加味されるのです。

## 3. 保育の場において、音楽の三要素がもつ意味

リズム、メロディ、ハーモニーは音楽を構成する3つの要素といわれますが、歌であれば歌詞も要素に加わるでしょうし、演奏形態（楽器編成）も重要な要素となります。ですから律動・旋律・和声の3要素だけでは十分に音楽を語ることはできないのですが、ここではひとまず、この音楽の三要素にふれながら、それぞれが音楽や演奏にどのような表情を与えるかを取り上げ、従来、子どもたちに気づいてもらうことの少なかった音楽を媒体

にして気持ちを表現することの保育的な意味を考えます。

(注)

ここに取り上げる音楽は、いわゆる西洋音楽と呼ばれるイオニアンスケール（長音階）とエオリアンスケール（短音階）を基本とする音楽に限定します。音楽はこれ以外にも多くの音階を用いた民族音楽が世界中に分布しており、日本の陽旋法や陰旋法などもその中に入ります。また、日本の音楽は基本的に1拍子であり、複数のメロディが同時進行するという意味においては多重な音の組み合わせが存在しますが、ここにいうハーモニーとは異なります。ところが、明治に始まる学校教育や流行歌、クラシック音楽への傾倒、とくにロックミュージックの影響によって、いま子どもたちが出会う音楽はその大半が西洋音楽の約束事に従うものになっていますが、子どもたちが口ずさむ歌には、変拍子や1拍子（これは言葉に忠実にメロディをつけるために起こる場合もある）が多くみられ、旋律も陽旋法（いわゆるファとシを使用しないので、四七抜き旋法とも呼ばれる、音の配列はペンタトニックスケールに同じ）が中心で、ハーモナイズの必要性を持たないものが多いといえます。

#### （１）リズム（律動）

リズム教育といった言葉が幼児教育に早くから取り入れたことから分かるように、音楽の三要素の中では、リズムがもっとも早くから保育の場で注目されました。それはリズムが身体的、運動的であるためだろうと思われませんが、従来からのリズム教育は、子どもの音楽的発達過程においてはメロディやハーモニーよりもリズムが早期の段階であるとされてきたこと、リズム感やリズムの表現能力の習得が早い時期ほど効果が高いと考えられてきたためでした（標準音楽辞典 音楽の友社）。しかしながら、具体的な指導内容はリズム楽器による器楽合奏やマーチングバンド、ジャック・ダルクロワが考案したリトミックなど、形式化されたものが大半を占め、さらには“じょうずに”演奏すること、演じることに主眼が置かれたため、保育の場における音楽のリズムの要素は、ある偏りがありました。ここではその反省に立ち、リズム楽器演奏を強調するのではなく、リズムが内包する意味を保育との関連で捉えようと思います。

そもそもリズムとは、第1拍とそれに続く第2拍以降の関係が生み出す拍動のことをいいますが、その拍の連続は少なくとも次の3つ意味を生みだしてきます。

##### ①拍と拍の時間間隔は速度を決定する

端的に言えば、メトロノームによってコントロールされるような速度（テンポ）のことですが、ラルゴやアダージョのように遅い速度はゆったりとした情感をもっていますし、アレグロは軽快な気分を醸しだし、プレストともなればアレグロに力強さやスリルが加味されます。

また、速度が変化することによっても音楽に表情を付けることができます。例えばリタルランド（だんだん遅く）は終止へ向かいますし、アツチェランド（だんだん速く）は、興奮をもたらします。

具体的な保育の場では、歌いなれた、あるいは演奏に熟達した曲のテンポをいろいろに変えてみたり、曲の途中で速度を変化させると、子どもたちの目は輝きだし、音楽の世界により深く没入するでしょう。

また、メトロノームのように客観的な拍の位置に対して、“つつこんだり”、“もたらせたり”することも“ノリ”に影響を与え、フレーズを歌うことに貢献します。

## ②拍の強弱は拍子を決定する

強拍と弱拍の繰り返しによって拍子が生れます。強拍と弱拍の繰り返しは2拍子、強拍、弱拍、弱拍は3拍子になります。4拍子は2拍子の繰り返しですが、3拍目は1拍目よりも弱くなることで、2拍子と区別されます。

またロックやジャズは拍の強弱が逆転していて、2・4拍にアクセントが与えられます。さらに四分音符を分割して、八分音符や三連音符、十六分音符を基準の単位とすることで、それぞれに固有の音楽世界を提示します。8ビートやシャッフル、16ビートと呼ばれる音楽などを思い浮かべてもらおうとよいかもしれません。

拍子やジャンルにおけるアクセントとは別に、フレーズに表情を付けるためにもアクセントは重要な表現となります。“フレーズを歌う”ことや、“表情をつける”手法の一つとして、拍の強弱やアクセントの位置は保育の場でももっと多用されるといいでしょう。なにより、保育者自身が歌ったり、演奏したり、踊ったりするとき、絵本の読みを工夫するような工夫が、音楽にも強く求められます。

## ③拍の並びは意味をもつ

サンバやルンバのような定型のリズムは、拍（音符）と拍（音符）の間隔とアクセントの位置によって特徴付けられています。たいていは1小節、または2小節の長さのフレーズの繰り返しですが、ボサノバなどは定型のリズムというよりも、雰囲気や醸し出すリズム感のようなもので表現されます。この定型リズムにもたらされる曲調は、それだけで独自の世界に私たち誘ってくれますし、子どもたちと音楽を楽しむときにも、さまざまなジャンルのリズムにアレンジすることで子どもたちもリズムをいろいろに楽しむことができます。

## （2）メロディ（旋律）

### ①メロディはリズムとハーモニーを内包する

メロディは音楽の主役ですが、たとえそれが単旋律であってもメロディ（西洋音楽に限定される）はリズムとハーモニーを内包しています。

メロディは音符の連なりですが、その連なりから音階を取り除くとリズムが残ります。五線紙上でいえば、メロディを形成する音符を、たとえばすべて第3線上に並べるとリズム譜になります。これは思いのほか重要なことで、メロディとして聴くと違って聞こえるのに、リズム譜にしてみると同型反復になっていることがよくあります。

メロディから重要と思われる音符を抜き出して、1小節、あるいは1小節の半分を区切りに五線紙上に縦に積み上げるとハーモニーが現れます。リズムと同じく、メロディはハーモニーも内包していることが分かります。

このように、メロディは音の高低にのみ意味があるのではなく、メロディを形成する音の連なりに内包されたリズム、ハーモニーと協力して音楽的意味を生成していることが分

かります。言い換えれば、音楽の三要素とはアナリーゼ（楽曲分析）や作編曲のために分類された要素であって、実際に音楽が歌われたり奏でられたりするとき、あるいは音楽に合わせて踊ったり演じたりされるときには、たとえその音楽がアカペラや笛の独奏であったとしても、三要素が分かちがたく協力して音楽を構成しています。

## ②メロディに表情をつける

さて、子どもたちと歌うとき、あるいは奏でるときに、メロディに表情をつけることで、より音楽的な表現を可能にすること、音楽の世界に子どもたち自らが入り込んでいけることが蔑ろにされてはこなかったでしょうか。

覚えて歌う、まちがえずに演奏することばかり大人の関心が向かってしまって、強弱をつけたり、だんだん大きくしたり、小さくしたり、といった音楽に表情をつけることを子どもに求めてみれば、それを子どもたちが楽しむことに、私たち保育者気付くに違いありません。

歌は、悲しい歌詞を楽しく歌ったり、楽しい歌詞を悲しく歌ったりすることができる不思議な表現の世界です。「楽しく歌う」ためには、あるいは「悲しく歌う」ためには、楽しい気持ちや悲しい気持ちになればいいのですが、その結果として音楽には微妙なニュアンスが加えられていきます。保育者はそれに無頓着であってはならないのです。

たとえば、上昇するフレーズは出かけていく、開かれていく、発展していくといったようなイメージを喚起します。反対に下降するフレーズは、帰っていく、戻ってくる、終息に向かうといったイメージをもたらします。おなじように、クレッシェンドやデクレッシェンドも、上昇や下降とよく似た効果を与えることができます。加えて、音楽が終わりを迎えるとき、だんだんテンポを落とすこと（リタルダント）で、気持ちにとどく終止を迎えることができるでしょう。

音の強弱も音楽に大きな明暗を与えることができます。フォルテやピアノによって求められる全体的な強弱の対比はいうまでもありませんが、音符の一つ一つに細かい強弱を与えることで、フレーズを“うたう”ことができます。それは歌曲に限らず、器楽の演奏においても重要であり、濃やかな音の強弱の変化はリズム感にも影響を与え、その人のその人らしさの表現を決定付けるといってもよいでしょう。

## （３）ハーモニー（和声）

ハーモニーと色彩はよく似ています。目だたないのだけれども、音楽や絵画に少なからず影響を与えます。メロディにばかりとらわれてハーモニーが与える曲調への影響に無頓着であるのは、描画において“かたち”にばかり目がいき（何が描かれているかしか見ていない）、“色使い”に気づかず、絵が与える印象が色彩に大きく依存していることや、一人ひとりの子どもの持つ色感に気づかないようなものかもしれません。ハーモニーが与える曲調への影響は、同じメロディに異なるハーモニーを与えてみれば（リハーモナイズといいます）よく分かります。

誤解をおそれずにいえば、保育の場の音楽は、主要 3 和音に限定されることが多く、ハーモニーの工夫によって多様な音楽的意味を求めることに消極的ではなかったでしょうか。1 台のピアノを使って、あるいはギターを爪弾いて子どもと音楽を楽しむとき、その音楽的

環境の豊かさにハーモニーの多彩さが与える影響は少なくありません。音楽が平板に聞こえるとき、リハーモナイズは音楽環境の豊かさへの飛躍となります。

子どもたちにハーモニーをハーモニーとして取り出し、その豊かさに気づいてもらう必要はありません。しかしながら、子どもたちが豊かな和声の世界を経験することは、音楽における印象と表現の問題を考える上でも重要であることは言を俟たないでしょう。多様な意味をもつ音楽環境を子どもたちのために用意することは、保育者の大切な役目であることは、他の保育内容と変わるところがありません。